

長野高専技術振興会の会員企業が400社を超えることから分かるように、長野高専は地元企業との関係が深く、地域経済から多大なご支援をいただいています。優秀な人材を育成し、あわせて企業の発展、地域産業の発展に寄与することが長野高専の使命です。今後地元企業との共同研究をより効果的に行う制度を立ち上げるなど、産学連携を強化していきます。

前任校等で培った教育手法を 長野高専にも

このたび長野工業高等専門学校校長に就任されたの抱負、貴学への思いをお聞かせください。江崎 抱負の前にまず私の経歴をお話しさせていただきます。私の高専との関わりはかれこれ50年になります。中学校を卒業した私は、三重県の鈴鹿高専に入学しました。これが高専との関わり始まりになります。鈴鹿高専で5年間学んだ後、開

校間もない豊橋技術科学大学へ進学しました。ここでは全国から集まった高専生と一緒に勉強し、大学院まで終えました。次いで同大学で教員の職を得てからは、やはり高専から編入してきた学生の教育や研究指導にあたりました。その後、母校の鈴鹿高専に移って25年間高専教員として勤務した後、2019年に福岡県大牟田市にある有明高専の校長を務め、3年後の2022年4月に長野高専に転任してきたという次第です。昔は高専の校長職に転任はなかったのですが、3年ほど前から全国に51校ある国立高専を束ねる国立高等専門学校機構の理事長の方針で、高専間の情報交流を進め、個々の高専が実施している素晴らしい教育や研究の取り組みを全国の高専に広めるとともに、文化をかき混ぜるといったことを目的に校長を転任させることが決まりました。この方針に沿って、高専教員から昇任した校長はその任期中に最低でも2つの高専を経験することになりました。

江崎 尚和氏

独立行政法人国立高等専門学校機構
長野工業高等専門学校校長

昭和31年12月8日生まれ、三重県鈴鹿市出身。鈴鹿工業高等専門学校卒業。豊橋技術科学大学大学院修了後、同大学教員として勤める。鈴鹿工業高等専門学校教授、有明工業高等専門学校校長を経て、2022年4月より現職。

産業の発展を支える人材の育成とともに 地元企業との共同研究等産学連携を通じて 地域の発展に寄与します

所が中心となつてこうした組織をつくることは全国的にも珍しく、鈴鹿は中部経済産業局から産学連携のモデル地区に指定されました。

また、有明にも地域の産官学交流事業を支援する組織として有明広域産業技術振興会がありましたが、その運営は大牟田市と地元商工会議所が連携して行い、有明高専をサポートする企業集団をつくってくれていました。高専が地元企業とつながるために、商工会議所は欠かせない組織です。この長野でも、今後さまざまな協力関係を築けたらと願っています。

高専の使命は、産業の発展を支える人材を育成することにも、先ほども触れましたように、地域の産業発展に貢献していくことです。長野高専でも、地元企業に向けたセミナーや交流会等を非常にたくさん実施しており、コロナ以前には2千名を超える参加者があつたと聞いています。また、将来の産業振興にもつなげていこうと、科学技術に興味を持つてほしい小学生や中学生を対象にした教育支援をして、サイエンスツアー（出前授業）、サイエンスライブ（公開講座）を実施しているほか、本校が協賛するキッズサイエンスでは学校施設の無償利用提供、教職員・学生による運営支援をしています。こうした場面でも商工会議所さんと連携した取り組みができると思います。

共同研究で高専卒人材の 雇用機会も増す

長野高専では地元企業との産学連携でどんな取り組みをされていきますか。

江崎 今お話しした研修事業の他、地元企業の皆様と共同研究や受託研究なども行っています。今後はその数をもっと広げるよう計画的に進めていきます。ただ、400社以上を数える支援組織であるにもかかわらず、大規模な共同研究プロジェクトがそれほど立ち上がっていないところは少し残念です。より効果的に産学連携を進める仕組みをつくるべきです。

これまでの経験でお話しすると、鈴鹿高専では「産学官共同研究室」という制度を立ち上げていました。企業から共同研究のテーマをいただいた際には、その目的達成に必要な複数の専門分野の先生から成るチームをつくり、1テーマにつき研究室を1つ提供します。その現場にはチームメンバーとなった教員が指導する学生や、テーマを持ち込んだ企業側の担当研究者も客員教授等として参加します。費用は1社2年間で600万円ですが、現在6件の共同研究が行われているようです。共同研究の推進という点で大変有効な制度でしたので、有明高専でも「マッチングラボ」という名称で同趣旨の制度をつくりました。また制度を導入

た。したがって、私にとつては長野高専が校長としての2校目となるわけです。

つまり、私が長野高専に来た大きな目的は、鈴鹿や有明で培った教育手法や立ち上げた仕組み等の良いところを本校にもたらし、教育のレベルアップと活性化を担うことです。

長野高専の先生方は、全国の他の高専の例にもれず教育熱心で、学生に対して手厚い取り組みをしています。また、本校は地元企業との関係が深く、長野高専技術振興会の会員企業は400社を超えます。学校に対する企業の応援団がこれほど大規模な高専は、私がいた鈴鹿や有明も含め他に例がありません。こうしてご支援いただく地元企業の皆様との関係をもっと深め、地域産業の発展に寄与することが長野高専の果たすべき役割の一つであると認識しています。

企業とつながるために 商工会議所は欠かせない

長野商工会議所との関わりについてどうお考えですか。

江崎 私が25年いた鈴鹿高専では、地元の鈴鹿商工会議所と互いに強く連携して活動してまいりました。と申しますのも、鈴鹿市には本田技研工業の工場をはじめ同社の下請け企業が集積しているのですが、国内企業の海外移転が進んだ2000年頃、万一ホンダも海外移転したら鈴鹿市は立ち行かなくなると、鈴鹿商工会議所がもの凄く危機感を持ったのです。そこで商工会議所が中心となり、鈴鹿高専も含めた地元の高等教育機関3校との産学官連携を進め、地元企業が独自のものづくりをして生きていけるようにと、SUZUKA産学官交流会を立ち上げました。当時商工会議

してから1年半ですが、そこでもすでに6件の共同研究室が立ち上がっています。ちなみに、有明では2年間で650万円でした。

共同研究そのものが成果を生み出すことは企業にとつて大きなメリットですが、研究室で学生と企業の接点が出来れば、将来の雇用につながる可能性も広がります。事実有明高専では、マッチングラボに参加した学生がすでに4人、共同研究を実施した企業に就職しています。長野高専でも同様の制度をぜひ立ち上げ、地域産業界の活性化のお役に立ちたいと願っています。

高専は、かつて日本の高度成長を担う人材を短期間で育成するために出来た学校制度です。海外には日本の成長に倣い同様の学校制度を導入した途上国もあります。もちろん今後の日本においても、実践的で行動力があり、先端分野を切り開く発想力に富んだ高専卒業生は活躍の場を広げていくでしょう。ただその数が少ないうえ、卒業後は地域外の大きな会社へ就職するケースが多いのが残念です。そうしたなか、長野高専の卒業生が全国の他の高専に比べ地元定着率が高いのは、技術振興会等を通じた地元企業とのつながりが強いからでしょう。その絆を一層強くするために、当校としても地元企業の皆様との共同研究の場を広げていきます。どうぞよろしくお願いたします。

江崎 尚和さんの横顔



学生時代は剣道に打ち込み五段を有する。現在の趣味は燻製づくり。ビーフジャーキーなど自家製し、焼酎の肴にしている。長野の暮らしに慣れたら、車で温泉巡りをしたいと話す。